

樹の位置、人の位置

校長 久保田 範夫

「なぜ、私はここにいるのか。なぜ、ここにいるのが私なのか。」
ふと自問し、明確な答えを見出せないことがあります。その答えを探し続けることが生きることなのかも知れません。そのような時、一つの手がかりとして読み返す詩があります。

或る位置

吉野 弘

樹の位置——それは

偶然が決めたものだろう。

樹高、幹周り、枝の張りかた——それは

樹自身が決めたものだろう。

地上からは見えない根の

緻密な土の抱きかたも。

或る位置に

同意したのではない。

同意するより先に、

浅い根はまず土を掴まねばならなかった。

その樹に私は尋ねる。

偶然が決めた君の位置を

君はどのように受け入れたか？

樹から答は返ってこない。

過ぎた歳月を

すべて樹形で語り

来歴の総量だけで立ち

それ以外を語らない樹。

(剛直で気むづかしい幹、しかし梢では

風や光と遊ぶ賑やかな葉のきらめき)

――反歌

枝を伸べ根を深めつつ己が位置 うべないゆくや樹々の明け暮れ

(1983年刊『陽を浴びて』より、『吉野弘詩集』(ハルキ文庫)所収)

偶然を引き受け、種子が落ちたその場で生長する樹木。人が、あ

る家族の一員として生を受けるのも偶然。私たちはその偶然を強い

られた宿命としてではなく、必要に変えなければならぬのだろう。

人はそのための葛藤を経験するし、樹木もまた枝を伸ばし根を張り

ながら（観賞用の植木として変則的な成長を強いられる木もあるだろう）、ある歳月をかけて自分の位置をうべな諾うための努力を重ねる明け暮れがある。

「過ぎた歳月を／すべて樹形で語り／来歴の総量だけで立ち／それ以外を語らない樹」、人間もこのように生きることができたらいいのに等、様々なことを考えさせてくれる詩です。

人は不本意な位置にいる時、ここは自分が本来いる場所ではない、という思いを抱きます。長い人生の中で、違う場所で己の力を発揮したいという思いは、完全には消せないかも知れないが、そこは心の持ちよう。私たちの人生にゴールは無く、どこまで行っても中継

点なのであり、「今いる場所は次へつながる重要な中継点」ととらえ、「まずはその場所ですっかりやっていこう」と考えることが大切なのではないでしょうか。